

尊男卑はあっても、間違っても男尊女卑はなかった。したがって夫婦単位などはもちろんなかった。

荒っぽい言い方をすれば男は単なる食糧確保の道具で、女性たちは獲物の料理、子育て（複数の男を相手にするから誰の子かはわからないが）とそれこそ太陽の鏡であって、石器、縄文時代を入れると何千何万年と優位な地位を確立して来たのである。

この女尊男卑が、いつの世から男尊女卑に変わったのだろうか。

古代以来近世までの日本にとっては中国は先進文化国で支配の側は、そこで学んだ支配体制を整備してきたのである。女尊男卑はあっても男尊女卑はなかった日本古来の土着文化に男性優位の刻印をささみこんだのは、男女差別の儒教文化を受け入れた支配の側の価値体系に、物の見方、考え方を根こそぎ掘めとられた結果ではないでしょうか。

差別が信教的に生活態様にとりこまれ、これが民俗として定着し、日常生活に習俗として是認されるとき、差別が抑圧の姿を鏡の裏にかくされ、差別されている人達

妻と言う名の女奴隷

女性史を主体に価値観を求めることを試みる時、生産の基底部で働く農奴が、農奴から小農として自立の身分に成り上がったときは、妻という名の女奴隷を持つことによつて成立ってきた。つまり一般的に奴隷的境遇に置かれてきた農奴が、自作小農の身分を獲得するために彼らの妻となった女たちの男に勝るとも劣らない働きがあったのである。

農業労働のほか、衣服はじめあらゆる生活物資をすべて自給する家事作業をおこなえ、余剰品は商品として販売したり物に交換をする。その間に子を産み、子を育て

が工場生産のように再生産することによつて、支配体制の安泰につながることを気づかずには貢献してきたからなのである。

るがこれらすべての働きは構造的にことごとく夫のものとなる上、ひとたび凶作に見舞われ、年貢を納めるにさしつれば、妻子は夫の所有物として売買、質入れの対象とされてきた。

女達は農奴として解放された男の妻になつても、主人（統轄者）の所有物から、夫の所有物にと身の移動があつても根本的には奴隷的境遇は一向にとり払われていない。そして男との対等性を失ない暗闇の深さをさらに色濃くして、近世をへて隷属状況は変ることなく近代とつづいてきたのである。まして幕藩政治は民、百姓に対



してあらゆる規則をもうけ、人間的に生きぬよう、そして直ちに墓場にかぬよう苦しみ続けてきた。かくして生産の基底部で働く人達が、生産された物が自己の物でない

売春

売春は人類の歴史とともに始まったと言われるが、女を商品として売買の対象にしたのはそう古いことではない。源平時代平家一門の隆盛のとき舞姫という白拍子から始まると言われる。白拍子は必ずしも売春そのものが目的ではなかったから、後世の廓制度の売

春婦とは異なり、起居も出入りも全く自由で、なかに名高い人の愛妾となり、行ないも正しく情操豊かで歴史の裏で名をとどめている女性も少なくないが、源頼朝は白拍子千手御前、義経は静御前といわゆる高貴な人に愛された。ことに静御前の哀しいまでの恋慕物語

くなつたときから、国際的に悪名名だたる妓楼による売春制がしかれ身売りの悲劇が何百年と続いてきたのである。

りは現代の私達にも通じるものがあります。愛の生き方として真剣なものがあった。

この時代から需要と供給の原理にもとづく現象として必ずしも品行方正な女ばかりでなく、金銭目当ての娼婦が出始め横行したといわれる。

時代が下がつて江戸時代になると身売りの現象が歴然としてくる。いくら幕藩政治でも人身売買は厳しく禁止のふれを出しているが、年季奉公という経済行為を隠れ蓑には歯がたたず半公然と認めらざるを得なかった。

身売りの定義を辞書を引いて調

べてみれば、身代金をとつて約束の年季の間、勤め奉公すること。とあるがあまりにも漠然としていてピンとこない。広義に解釈すれば商家に丁稚奉公ないしは近代の借子制度も身売りの範囲に入るが、本来の意味は若い娘の身売りのことを指すのが順当な気がする。つまり親が身代金をとつて若い娘を

遊女屋へ年季奉公にだすことが身売りであり、一種の人身売買である。年頃の娘が自己の意志でこの世界に飛び込んでゆく場合もあるが、多くは親が貧しい苦境を乗り切るために娘を金に替えるのである。それはほとんどストレートに遊女屋に売るのでなく、必ず甘言を啜して娘の売買を職とする「女衞」なる中間の周旋屋なる者の存在があつた。女衞とは聞きなれない言葉であるが、女衞の「衞」は売る意味で江戸時代には女を遊女屋に売ることが商売になっている人なのである。



こういう最底の人間共の周旋により、娘を買入れて妓楼を経営する遊女屋の主人を人々は「忘八」と言った。「忘八」とは中国古典による仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌のことで人としての道義を失った人面獣心なる人のことをいうのである。人の愛児をわずかの代金で買い取り妓楼内に飼鳥のようにに囲いおき、遊女として精根限り客に実情を尽させ、朽ちればポロ口切れのように投げ捨てるのである。

遊廓は幕藩時代、公許された唯一の売春宿で有名なのは江戸の吉原である。それ以外では隠れ売女

津 軽 領 内

津軽領内でも、深浦、鯉ヶ沢、青森と三ヶ所に遊廓が設けられ、公許遊廓として許可を与えていた。遊廓に売られる娘はほとんど在方(田舎)と町方(都市部)の貧農

の私娼として岡場所があった。公許以外の売春宿は、ドラマ時代劇をみても分るとおりたびたび取締りの対象になるが、それは幕府が税の関係から取締り処罰の対象にしているのだから決して身売り娘の救済を目的とはしなかった。公娼の遊廓からは一定の租税を徴収できるが、隠れ私娼窟からは税がとれない。それに私娼窟は安く黙認すれば公娼街がさびれる。何のことはないモグリ売春の虐い下げられた娘の売買をとがめるのではなく租税の多収を狙った政策の取締りであったのだ。

たわら租税の貢上を計ったからに違いない。

一般のモグリ売春については、江戸でも津軽でも特別風紀を紊した女性にたいしては罪科として遊廓に奴女郎として競売に処す制度があり苦界の苦しみを与えた。

津軽藩の競売に処された女の価格の記録は見当たらないが、江戸における刑罰による廓奉行の競売価格は左のようになっている。

娘さく 二十七歳
 金 二十四二分二朱
 人妻しげ子 二十歳
 金 三十四二分二朱
 人妻とわ 三十六歳
 金 三十七兩
 後家はま 四十二歳
 金 四兩二分一匁二分



これが二年から五年位迄の奴郎の年季奉公の価格であるが、一般の人が商家あるいは武家屋敷に奉公する一年の給料が三兩位であるというから、比較してどれ位であるか想像つくであろう。

天保三年(一八三三)の江戸の小売米価は一石(一五〇キロ)につき約一兩一分となっているから、米の価格から推して給料の対比は恵まれた方ではなかったけれども、それでも百姓の粗生産量の三反歩位に匹敵するから百姓よりかは恵まれていた。

幕藩時代、時刻と貨幣の使い方は現代の物差しで考えると容易なものではないが、ことに貨幣の使い方は、武士は金貨、商人は銀貨、庶民は銭貨と非常にややこしい。ついでに近世における貨幣の換算をかかげてみると、次のようになっている。

大判は一〇兩

(実際には質が悪いので始め八兩二分からのちには七兩二分)

- 小判 一兩四分十六朱
- 二分判 一分判
- 二朱判 一朱判
- 銀貨 丁銀、豆板銀、丁銀は四十匁(秤量貨)秤にかけて他の貨幣と両替)
- 一分銀 (一分判と同じ)
- 二朱銀 (二朱判と同じ)
- 一朱銀 (一朱判と同じ)
- 五匁銀
- 銭貨 百文銭、十文銭、四文銭、一文銭

慶長十四年(一六〇九年)幕府の公定相場は金一兩銀五〇匁二錢四貫でしたが、明歴頃からは金一兩二六〇匁前後となり幕末にはさらに変動しましたが、金は四進法、銀、銭(銅貨、鉄貨)は十進法などと換算は複雑であり、実にめんどろなくみであった。また

武家、富商にしても日常こまかい買物は銭貨を使った。実際には銀と銭を主体に流通し、金は名儀上か、儀礼用に多く用いられたのである。

幕藩時代までの身売りは、これくらいにして昭和の代は後述するとして、次に女工についてふれてみたいと思う。

※メモ※

幕藩時代の貨幣である一兩小判は、現代の物価に対比してどれ位の価値を示しているかは、簡単に比較価値を割り切れることは容易でないが、江戸時代の初期は一兩小判で米二石、中期で一石、後期になると五斗と、幕藩時代二六〇年を通して物価は四倍しか上らなかつたからほぼ安定した物価と言っている。

ちなみに昭和初期に米一俵十匁前後であったものが、今は二万円だから六十年間に物価は千倍にふくれ上っている。

女工

「労働時間のごとき、忙しきことは朝床を出でてただちに業に服し、夜業十二時に及ぶこと稀ならず。食物はワリ麦六分に米四分、寝室は豚小屋に類して醜陋見るべからず。」

これは明治二十九年頃の桐生、足利地方（栃木県）の製糸工の有様を毎日新聞記者の横山源之助が外から眺めた（日本之下層社会）

女工哀史

明治、大正の女工の立場を内側から書いたものに細井和喜蔵の、「女工哀史」がある。

著者は繊維工場の職工として働いた体験をもとに、克明な記録調査を重ね、激しい労働の明け暮れに、自ら職業的な疾病と闘いながら執念ともいべき努力でこれを

本の中に書かれている文章の一節である。また雇主が業務が暇な時は他の雇主に女工を転売しその間の賃金は不当に自分の懐に収め、

奴隷を使役するように収奪したと記している。この悲惨な女工たちがどうしてつくられていったかは内側から書いた女工哀史を再現してみなければならない。

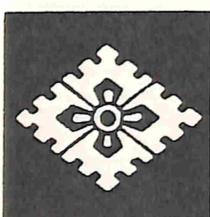
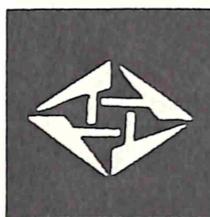
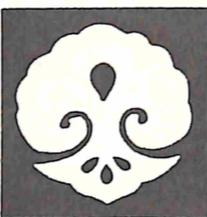
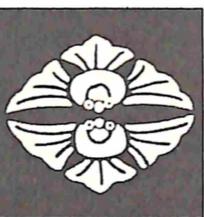
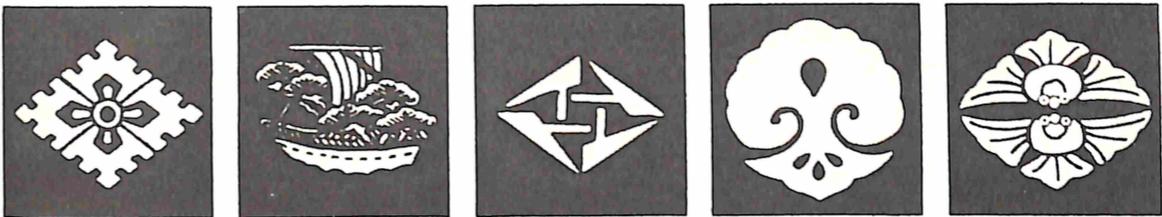
書き上げた。

大正十二年（一九二三）七月に起稿、大正十四年に初版が発行されたが、それからわずか一ヶ月後に死亡したのである。著者は女工哀史の中に生きて内側から告発した点は細井さんでなければできないことである。

細井さんは人間が生きて行くための最底の条件である衣、食、住の衣服をつくる仕事をしている女工を「人類の母」として限らない尊敬と親愛を抱き、女工の非人間的な扱われ方に激しい憤りをたたきつけている。

細井さんは女工募集の方法と変り方を三期にわけているが、その第一期は日本で組織的な工場ができた明治十年頃から、二十七、八年の日清戦争の頃までとし、この時期は前借金の制度もなく「年季制度」も名目だけで、退社は本人、親許の請求で自由にでき「強制送金制度」もなく手紙の没収もなかった。

第二期は「自由競争時代」で近代産業が急速に発展を遂げつつあるにつれて、工場の数も増え、女工募集が容易でなくなってきた。一度応募した女工も待遇が悪ければ、郷里に帰って悲惨な状況を訴えるので途中で逃げられないた



めに奴隷的女工の束縛が必要になり、身代金制度、年季制度、強制送金制度、教育制度が生まれる。働き乍ら裁縫を習え、私立小学校を設けて学習させ給料の安いことに不満を抱かぬ女工を集めることを思いついた。この発想が予想以上に効果を奏し、小学教育は無料、子供乍ら給料を稼いで親許へ送金するというので、子供を工場へ送り出す親が続出した。

第三期は「募集地保全時代」でこれまでウソとごまかしで真実をかくす、誘惑的手段で人集めをして来たが、女工に対する恐怖制度が自由競争の弊害で山深い僻地の果てまで紡績工場の怖しさが口伝えに流布されたので募集が更に困難を極めた。それで今までのような生優しい手段では人集めができにくくなった。企業の利益、利潤の最底の原点は、「土地、資本、労力」とこの三つの一つが欠けても工場生産は成立たない。ただ彼

等に欠けているのは底賃金で働かせる労働力なのである。そのためにはあらゆる新しい手段を構じなければならぬ。

その方法は直接募集と囑託募集に分け、直接募集は会社の社員が自ら募集地へ出張して募集し、後者は募集人にまかせ女工一人につきいくらで買い取るのである。

募集人にまかせた募集は要するに女街であって、嘘八百を並べて場合によっては肉体関係をつけた女性を方々の製糸工場を転々とさせたあげく、最後には女郎屋へ売りとばしたりした悪徳募集人もあった。またいったん他の工場で働いている女工を有利な条件を餌に誘惑したり、地方募集は、募集事務所または出張所をつくり、金力で村長や、村の有力者に取り入り場合によっては駐在所や警察署まで買収し、娘のいる家へしばしば付届けをして女工を集めるのである。

以上のように細井さんの体験からみた現状分析はさすがに鋭い。資本の側から立った立場にはいささかの弁護も与えはしないが、現代のように巨大化した独占資本体制とは違い、国際相場、景気に左右され資本家どうしの浮沈は絶えることがなかった。その間を根無草のように緩衝剤の役目を果たしたのは底辺生活を余儀なくされている農村の娘たちなのである。

労働条件における作業時間の長いのは紡績工場が最たるもので、紡績十二時間織布十四時間と一応午前九時と午後三時に休憩時間がもうけられているが、台の掃除と次の作業の段取りで遅れてしまいい休むことができない。昼食時間は十分となつてはいるが、女工は一人たん作業に入ると休憩はないも同然で、今では考えられない苛酷な労働を強いられたのである。大正も終り頃に女工募集、引き抜きなどで社会問題化されたが、女工の

立場は依然として改善されることは少なかった。

日中の仕事に激しくきついても、安らかな休憩の場所があれば疲労回復も早く望めるが、寄宿舎とは名ばかりの二、三畳の部屋に五、六人一緒にぶち込まれ、豚小屋同然のなかで一日一ぱい監視と抱束のなかで身動きならぬ彼女たちは生きる立場に相違があっても何ら公娼と変らない。

娼婦に身を堕した女性のなかで、女工出身者が一番長続きするといふことは、他の職業や環境の女性たちに堪えられぬ苦界の世界も彼女等にとってはまだまだであったとは、政治の貧困と資本の収奪に

からゆきさん

日本女性史のなかで隠された部分のからゆきさんは最も惨酷な女性史であり、いかに女性が女性蔑視の環境におかれたかこの一事を

は腹の底から惨りを感じる。嘉瀬村からも多数の身売り女工が連れていかれたが長時間労働と不衛生な環境による疲労のため肺結核に犯され家族からさえ白眼視されて一人淋しく死んでいった娘もあつた。

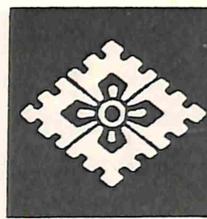
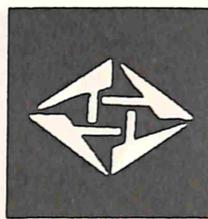
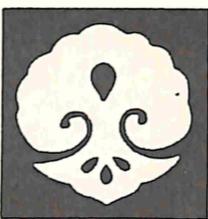
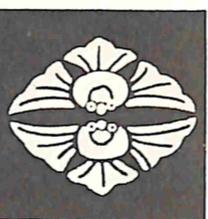
明治十六年内外人交歓の社交クラブとしてできた鹿鳴館に華やかに出入りした「豚女共」の蔭に文明開化、産業革命を支えた女工たちは人の子であつて、人間の扱いをされず短かい一生を心と体をすり減らしながら死んでいった彼女達に安らかな冥福を祈るほかはない。

もつてもわかる通りである。今に思へば敗戦後まもなくの教科書にからゆきさんのことが写真入りで説明されていましたが、十代なか

ばの私共にはなぜ、どうしての疑問符を抱きはしたが、それが本質的に半合法の仮面をかぶり大量殺人につながることは理解できなかった。殺人といつても直接銃弾や首を絞めるのではないが生存が維持できないような状態に追い込む状況をつくるからなのである。

からゆきさんという言葉の由緒は「唐人行」あるいは「唐人国行」という言葉が詰ったものである。

からゆきさんは幕藩末期に始まり、海外渡航が解禁になった明治になってから急に数を増していった。からゆきさんに売られた正確な数字は今だにかむことができないが推定で何十万人にもなったといわれている。明治四十一年（一九〇八）の時点で公式に確認されたからゆきさんの数は三万七千九百九十一人と発表されているが、その何倍もの公認されないからゆきさんがいたはずだろうし、それが半世紀以上の長期にわたって次



々に補充され続けていたのである。彼女たちは、オランダ船、イギリス船、ロシア船等に、誘拐されて海外に連れ去られてゆくのが実体であった。

明治二十三年の毎日新聞によるとからゆきの行き先は北は中国大陸の北部、ウラジオストックや、シベリヤを経てロシアに至り、東はアメリカ大陸、南は上海、香港から東南アジア各地におよび、オーストリア周辺の島々に及ぶ。さらに西はビルマから、インドのカルカッタ、ボンベイとつぎアフリカの東部海岸までに至っている。と報導されている。

このおびただしい数のからゆきさんは、長崎県の島原、熊本県の天草地方の女性でそれがほとんど誘拐という手段で売られていった。日本政府は日露戦役後、富国強兵という国策の立場から海外に勢力の影響を拡大しようという時代ではあるが、日本人の在留してい

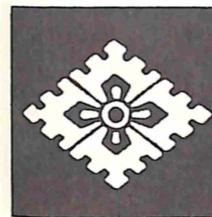
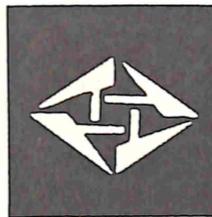
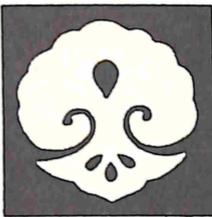
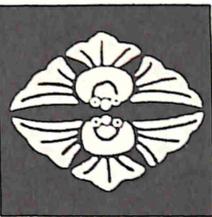
る所には必ず日本人の売春婦がいた。日本領事館でさえ実情のつかめない僻地にまで日本人の経営する妓楼があつて日本人女性の売春婦がいたのである。

売春天国日本では女を前借金で縛って売春を強制する管理売春を政府は公認していたし、また男が妓楼へ遊びに行くのが当然で、むしろ遊興が男の甲斐性でさえと賛美される風潮があつた。男性優位の過つた観念の過剰からか、からゆきさんの奴隷以下の悲惨な生活の実情を知りながら政治の分野でだれも取り上げようとはしなかつた。

からゆきさんは九州僻地出身で占められているが、このような僻地は耕地も少なく、しかも火山灰土で瘦地が多く子供が成長しても家に留めおくことは家計が許さない。貧乏人の子沢山で、これといった産業もない時代だから十二、三歳になると男女とも奉公にださ

ざるを得ない。ことに少女の働き場所は子守か女中ぐらいで、子守や女中の地位は今さら書くまでもなく朝早くから夜遅くまで働かせられ休みといえれば盆と正月、年に二回である。しかも僅かな給料でも親に仕送りしなければならぬ。このような娘たちが誘拐魔の女街にねらわれた。女街たちは立派な服装をして貧しそうな娘たちを見かけると道端などでたくみに話しかける。狙う娘たちの年齢は十五、六歳で、外国へ行くと仕事がお金がお金はここにいるより何倍もの給料が貰え、親許にも多く送金できるし、昼働いて夜は裁縫や、編み物を習わしてもらえるとかいろいろ甘い言葉を並べて娘たちの気をそそるのである。

子沢山の貧しい家庭に育ち両親からでさえ心優しい態度で接されたことの少ない境遇におかれてきた娘たちは、辛いだけでこれといった楽しみも希望もない毎日の



生活から、もしかしたら人並な生活が可能になるかと願いを込めて話にのり承諾の返事をするのである。女衞は男だけでなく女の女衞もいた。産婆、下宿のおかみ、髪結、女工などいろいろな職業をもっている人が仮面をかぶり、陽の当たらない貧者の娘たちを鬼畜の餌に振り分けるのである。

忠義と孝行が道徳の二大柱とした国是の皇国史観に足枷を強いられていた貧民は、親に孝を尽すという意味から娘が誘拐されても食いぶちが少なくなるのでたいして抵抗を感じなかったといわれる。

卑劣な誘拐手段で海外に連れられていかれるのはもちろん外国船による密航である。密航はその船の一部の船員を買収し約束通り運ばれて行くのだが、娘たちが隠されるのは船倉、ボート、マストの帆の巻き込んだり空の給水タンクに詰め込むのである。しかも密航に失敗して逮捕されると「密航婦」

云々とまるで娘本人の意志で密航を企てたかのような言い方をされ、罪人扱いをされるのは国民と

からゆき終末

処女にしていきなり売春婦に仕立あげられることは現代の考察では考えられない苛酷な状態ですが、

どれほど悲惨な境遇にあおうともからゆきさんに逃げ場所がない。逃げられない彼女たちに妓楼主は休日を与えないどころか少しくらい身体が調子が悪くても立てるうちには休ませることなく一晩中客をとらせられるのである。

現地の季候になれないうちに無理な売春婦生活を強いられ次々に病気で倒れていった。

マラリヤ、風土病、肺結核と病に倒れても医者に診せることなく野垂れ死に同様な死に方をしていったが、南方各地の日本人墓地のうち七、八割はこの誰とも分ら

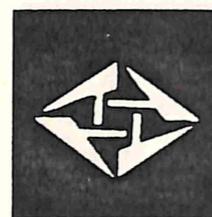
して政治の範疇にありながら庇護の一片らも与えてもらえない階層だからなのである。

ない、名前だけ書いたからゆきさんの墓だという。

そしてほとんど享年十七とか十九とか二十歳以下で三十歳まで生きのびた女は数少ないのだが、十五、六歳で誘拐され、売買婦の泥沼に投げ込まれたからゆきさんの多くはそれこそ苛酷な生活に数年耐えることが精いっぱいなのである。

死亡したからゆきさんの後には軍隊と同じでまた新しいからゆきが補充され、単なる消耗品として、この世の地獄絵巻ながらに運命づけられていたのである。

売春王国日本も近代国家として体面もあり国際的な批判の矢面に立たされるのを恐れて大正九年に



日本の領事は南方の妓楼を廃業させ取り締りを強行した。

強制的に引揚げさせられたからゆきさんは、日本に帰ってからの

K子の消息

消息の記録がないのだが、おそらく故郷の家族さえ温かく迎えてはくれなかったであろう。

今こうして、娼妓、女工、からゆきと身売りしなければならぬ情況と身売り後の彼女等の惨酷な生活を断片的にとらえてきたが、軍隊につきまとわされた慰安婦のことは、紙数の関係で後日軍隊騒動のある方に書いてもらいたいと思います。身売りの根本は差別であり、差別がもたらす政治、経済の構造があるかぎり身売りは絶えることがなかった。

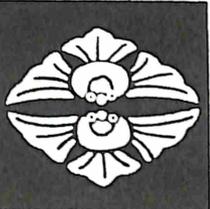
戦後基本的人権がゆきわたり、差別の色紙は取り払われたかみえるが今だに完全に払底されたとは言えない。

第二の人生の出発といわれる結婚式において〇〇家結婚式場とい

親に孝と目に見えない儒教倫理の民俗が女を犠牲の防波堤に追いやってきた。娘たちも泣く泣く、親のため、兄妹のためと自分自身に言い聞かせ屠場に引かれて行く牛馬のように身の不遇を嘆きながら売られていった。

前述のK子も周旋屋なる女衞に連れられて東京は吉原のある妓楼に住込ませられた。

彼女は見るも始め、聞くも始めの異様な環境にただ泣きじゃくりばかりであったが、周旋屋なる者におそわれ性の何かを知った女になったという。その妓楼には先輩として飯詰から売られて来た女性もいたが、同郷のよしみで身の不運を語りあったという。K子の消息は一時途絶えたがああ激しいアメリカ空軍の大空襲にも生き抜き、戦後数年にして縁あって西郡稲垣村のある人のところに後妻として迎えられたが、幸薄い彼女は夫に先立たれ、晩年は五所川原市内の



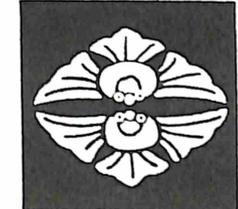
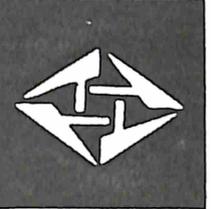
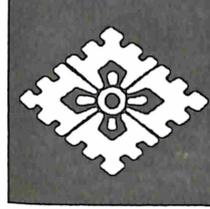
小さなアパートで一人淋しく死んでいった。彼女の死後二、三年にして私の耳に入ったが生存しているうちに一度でもいいからお世話

昭和五十年(一九七五) 国際婦人年とよばれた年があった。女性の地位向上をはかり男女の差別がこの地上から消えてなくなる

先進国と後進国とは質的に大きな相違があり、踏みつけて他者の痛みをかえりみず自分の抑圧の理論だけを押しつける鈍感さは第三世界の女性たちからきびしく批判

嘉瀬の身売り

身売りの根源は一口でいえば生活の貧困と一言のもとに片付けることができるが、その貧困がどうしてもたらされてきたかは識者の方がいろいろな角度から解明して



になった御礼を言いたいと今は慚愧の念にかられる気持ちがいっぱいなわけである。

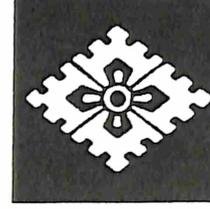
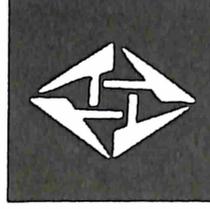
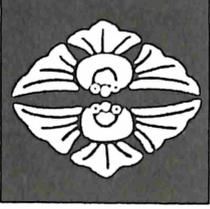
わが国に於てもみせかけの平等ではなく真の男女平等の確立を掴むには、上部構造の人たちよりも生産の基底部で労働を担い日夜生活と闘いながら生きていく大多数の女性たちが平等であり、差別から解放されないかぎり道はまだ遠いであろう。

おりますが、私は体験的に見た、聞いたでの羅列しかできませんがそれに基づいて嘉瀬の悲しい階層の生き方を辿ってみたいと思う。嘉瀬村でも昭和六年から十一年

迄に売られた娘の数は三十名を数らないと前にも書きましたが、嘉瀬本村だけでもはつきりしている数は二十四名で、明治以来からの身売り娘の数は相当な数字になっているであろう。

その正確な数字はさかのほればさかのほるほど不明な点が多くなり、警察署の掌握でさえ実際とはかなりの差がでている。

娘を身売りした親でも対世間的に我が子を買ったといえれば疎外の域に位置づけられ、習俗の輪廻から蔑しみの土俵にあげられ、そうでなくても貧のために小さな殻に閉じこもりがちな立場にあるものが、さらに生活上制約を受けることになるので、できることから隠そうとしなければならぬ。実際に娼婦に売ったことを承知の上でも、女工にいったとか、親類の手伝いにやったとかで少しの間でも体面を糊塗しようとするから身売りの数は確実に把握するこ



とは困難をきたしたのである。表面は穏やかに見える農村でも一皮むけば「隣の貧乏は鴨の味」と隣人に対する優しさが失われ、隣の不幸を口では慰めながら、腹では喜ぶ二重人格性が日常化されていた時代であればこと更、身の不幸を公表する必要はないのである。

隣の不幸は鴨の味を裏返しすれば「隣の家で倉を建てれば憎い」と誠に近視眼的な生き方しか知らないというよりそのように仕向けさせられたのはずっと昔からであったろうか。

しかし昔はそうでなかった。生産の底辺で働く人達が連綿と貧しいのは、彼らが働きたしたものが彼らのものでない社会のしくみにつくられて以来のことであると前文に書きましたが、それが「家」の制度と資本制の競争社会に知らずしらずのうちに巻き込まれてしまったツケなのである。

幕藩制度の末端組織として五人組制があったときは、お互いに監視の役割を果すとともに、年貢の連帯責任を負わされているため、互いの生活が互いにひびきあうので「鴨の味」は通用しなかったのである。

年貢収奪の同じ被害によって結ばれている村落共同体は一面支配の側の制度を消化しながら、その裏には収奪から逃がれたいかたい団結が自じと生活風土にあったのである。

このような生き方からは連帯意識は欠くことのできない要素もっているが、明治にはいつて近代封建制のもとでは曲りなりにも自己理念が前面に押し出され、資本の前には他をかえり見る余裕も薄らぎ底面化した鴨の味が生活競争意識をしてくすぶって戦前まで続いてきた。昭和の身売りは、金融資本、地主、小作、水呑百姓の系列の構図

むすび

天皇制は敗戦を期に瓦解し家制度も新民法をして崩壊しつつあるが、その巧罪は別として人間が人間としてまた女が人間として平等